

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 14号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成
二十五
年二
月
第
十
四
号

< 2013年 2月 >

古賀 順子

カルチエ・ラタン

暖かい元旦を迎えたパリでしたが、1月中旬から急に寒くなり、パリでは珍しい10cm位の雪が積もりました。昼間も1-2℃を超えない日が続き、暖房なしでは凍えます。家に居ることも多く、昼間の電気（暖房費）節約を兼ねて、歩いて行ける映画館に通うようになりました。カルチエ・ラタンには、Le Champo, La Filmothèque du Quartier Latin, Reflet Médicis など、古い映画を安く上映する名画館が並んでいます。

「カルチエ・ラタン(quartier latin)」は、中世にラテン語を話していたことに由来する地区です。現在のパリ5区に位置し、ソルボンヌ大学を初め、コレージュ・ド・フランス、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館(パンテオン広場に面するヨーロッパ有数の図書館。6世紀初頭フランク王クロヴィス1世に遡る地。現在の建物は、エッフェルに先立つ鉄材の先駆者アンリ・ラブルースト設計で1851年完成。閲覧室の鉄のアーチがとても綺麗です)などがあり、フランスだけでなく世界中から学生や研究者たちが集まる学問の地です。書店と映画館が多い場所でもあります。

最新技術により画像や音のノイズをリメイクした「天井桟敷の人々」(45年作)、ヴィクトル・ユゴーの小説を映画化した白黒サイレント「笑う男」(28年作)、「ローマの休日」(53年)、「バベットの晩餐」(87年作)など、忘れていた作品を見直す良い機会になりました。シャンポリオン通りのLe Champo 館では、昨年末からロマン・ポランスキー監督を特集しています。ポーランドで撮影した「水の中のナイフ」

(63年)、「吸血鬼」(68年)、「チャイナタウン」(74年)、「テス」(79年)など代表作をまとめて観ることができます。1本500円(10回割引50ユーロ)。毎回学生とシニア中心の20名を超えない客数です。1月15日大島渚監督が死去すると、1週間後には追悼上映が行なわれました。フランスのアラン・レネ監督のナチス・ユダヤ人虐殺ドキュメンタリー「夜と霧」(56年)に捧げられた「日本の夜と霧」(60年)です。松竹のヌーヴェル・バーグと称される大島渚監督が、60年日米安全保障条約締結反対運動(安保闘争)を題材に撮影した映画です。フランスには邦画ファンが多く、私も日本では知らなかった作品をパリで観ています。若いフランス人にはアニメも人気で、宮崎駿監督「となりのトトロ」(88年)や「魔女の宅急便」(89年)、昨年公開された細田守監督「おおかみこどもの雨と雪」など、日本の漫画やアニメーションはフランス社会にしっかり根付いています。同様に、日本のフランス映画ファンも多く、昨年公開された「最強のふたり」(原題 Intouchables)や「アーティスト」(The artiste)を観られた方も多いと思います。

映画に限らず、例えば現在公演中のバレエ「かぐや姫」では、鼓童の和太鼓がバステューユ広場のオペラ座に響きます。建築の分野では、メス・ポンピドゥー・センターの例だけでなく、昨年12月一般公開がスタートしたフランス北部リール郊外ランス(Lens)市にできたルーブル美術館分館は、日本人建築事務所 SANAA の設計です。文化面での日本とフランスは、互いに惹き付ける強い関係で結ばれていると言えます。そして、パリの「カルチエ・ラタン」は、そうした日仏の絆を精神的に育てる大切な土壌だと感じます。

サント・ジュヌヴィエーヴ図書館の閲覧室



(撮影：古賀 順子)